

話題33 平成25年沖縄県医師会医事功労者県知事表彰代表挨拶

新年あけましておめでとうございます。ご紹介に預かりました国立病院機構沖縄病院の石川であります。僭越ではございますが、沖縄県の地域医療を支えてこられました久田先生をはじめ、受賞の先生方に変わりまして感謝のご挨拶を申し上げます。

本日は、身に余るすばらしい賞をいただき、光栄に思いますとともに、身の引き締まる思いがしております。これもひとえに、県医師会の諸・先輩の先生方のお力添えによるものと感謝いたします。

私こと、この3月で定年退官を迎えますが、月日の流れは速く、「光陰矢のごとし」と表現されますが、宇宙にも飛び立つ時代の到来で、弓矢には例えようもなく、宇宙に向かうロケットのように、あっという間に臨床医としての40年の歳月が過ぎ去ったような感がしております。

思い出してみますと、琉球大学の保健学科の付属病院が那覇市内の与儀にありました当時、恩師・源河圭一郎先生から医学部卒業後5年目の駆け出しの外科医の私に、一緒に国立病院へ行こうとの誘いがありまして、その後ひたすらに走り続けて、気がつくやうに定年というラインが目の前に迫っていたという今日このごろの心境であります。

昭和55年、当時は全くの、医師の絶対数の不足した時代でした。420床の国立病院に医師数は11名でした。250床の結核病床があり、内科の先生方だけでは事足りず、外科医も結核の患者さんを受け持つ時代でした。周囲を見渡しますと、ハンセン療養所の医師は園長と副園長先生の二人だけで奮闘しておいででしたので、応援態勢を組むのが当然のことだと考え、片道3時間の道のりを通いました。身近には、那覇市の救急診療所も輪番制で応援しないと運営できない状況にありました。

そのような時代から、今や隔世の感があります。結核が猛威をふるった時代から、生活習慣病の時代へと様変わりしました。現在、沖縄病院の結核の入院患者数は常時20人程度です。肺がんの手術自体も20、30センチの大きな傷で開胸していた時代から現在、4-5センチ程度の傷で手術が行われる胸腔鏡の時代になりました。

変わらないのは、医者がいないということです。とくに外科系の医者が少ない。絶対数の不足した時代から、医師数が相対的に不足する時代になりました。今後、解決しないといけない問題は山積しているものと考えますが、地域医療を護るためにご尽力くださいました県医師会の先輩の先生方の努力に報いるためにも、一つ一つ現代医療の抱える問題、そして地域医療の問題にと地道に向き合っていないといけないものと、思いを新たにしております。今日の日の受賞を励みに、微力ではございますが地域医療に貢献すべく、引き続き走り続けていきたいと思っております。今後とも会場の先生方のご指導・ご支援をよろしくお願いいたします。

沖縄県医師会の今後ますますの発展と会員の先生方のご健勝をお祈りしまして、受賞者を代表してお礼と感謝の挨拶といたします。ありがとうございました。



平成26年沖縄県医師会新年祝賀会・医事功労者表彰式

